

---

# プラスマイナスゼロの日常式

花浅葱羽羅

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

プラスマイナスゼロの日常式

### 【Nコード】

N5831L

### 【作者名】

花浅葱羽羅

### 【あらすじ】

全てを裁く神判に少女は任務を任された。舞台は創園とラテスそして、『聖域』。三つの世界の中で少女は真実を知ることになる。血生臭い己の過去と、神判の本来の存在理由を。 - 「貴女には大切な役目がある。大切な、役目が」 -

## プロローグ「転身」

### 転身ノ間

「これが貴女の罪。貴女には『罪を償う』ということをしてもらわなければなりません。」

「はい。」

「貴女は『罪を罪と自覚』しています。」

「え……」

そこは広い広い白ばかりの部屋。唯一色があるのは罪人の瞳と髪の色と、その前に立つ人の瞳と髪の色のみだった。

「不思議なんでしょう?」

「はい。」

「確かに、人の心を絶対に信用できるわけではないでしょうが……」

「今までたくさんの人を見てきました。」

「貴女の罪は貴女の心に深い傷を残すでしょう。」

「……」

「その罪を償う為には、その深い傷があると大変なことになってしまいます。」

その罪人は前に立つ人を動揺した瞳で見た。その瞳は前に立つ人に対する疑問と恐れをその人に伝えた。

「罪を償う為に働いてもらいます。その深い傷は人を恐れている。

働くには人との協力が不可欠です。そのために心の傷は大きな障害となる……ですから記憶を無くしてもらいます。」

「っ……しかし!罪を忘れるとはそれこそ……」

「一番の罪であるか？」

「はい。」

「確かにそうかもしれませんが…しかし、しなければならぬことなのです。」

「…。」

「依存はないですね？」

「…はい。」

その罪人は頷くしかできなかった。その、前に居る人は、

神さえもその判断で裁くことの出来る神判しんぱんだから。神判は全てだから

「おぎゃあ おぎゃあ」

罪人と神判がいた所には17歳ぐらいの少女と、一人の赤子だけ  
がいた。少女はその、肩ほどの赤茶色の髪を揺らしながら赤子をそ  
の腕に抱き、ピンク色の瞳で赤子を見つめた。

「転身まわりかされたんですか？」

「怜ね」

「その子をなんと呼ぶのですか。」

「そうね、この子は『萌もえ』どこかの世界の言葉で、神を表す言葉。」

「神…ですか。」

「この子は神に愛される子となるから」

「夢を見たのですね。」

その怜という、少女と同じくらいの年齢の少年の質問に対し、少女は笑みを浮かべたままだった。

「秀は？」

「任務が長引いているようです。」

「そう…星ノ上ノ君で任務のない者は？」

「在のみです。」

怜は少しだけ顔を歪めてそう言った。少女も困ったような顔をする。

「彼は11歳…少し若いが、萌の教育係兼トウルとして。」

「わかりました。」

「彼には私が伝えるわ。怜は全員に知らせてね。」

「はい。」

そして、物語は誕生した。

## プロローグ「転身」(後書き)

はい。まだ終わってない連載があるのに始めるといふ無計画と  
^でも、こっちは一応出来てるんです(言い訳)

神判の名前はすぐに出てきます。

## 第一話「少女とその兄」（前書き）

説明部分はさらっと読んだだけでいいと思います^^

## 第一話「少女とその兄」

時は瞬く間に十年の年月を流した。

「だあああー！」

「ぐあっ」

ドカンッ…パタン

ここは武道館。そして十歳という年齢にしてはかなり低い身長  
の萌は、その体の四倍ほどの男性を投げ飛ばし、服の乱れを整えた。  
プラチナブロンドの腰ほどまであるストレートの長い髪を高い位置  
で一つに束ね、澄んだ空色の瞳持った小柄な少女の萌はむさ苦しい  
武道館でかなり異質だった。

しかし、そんなことはどうでもいっても言うように、萌は声を  
張り上げる。

「ったく、このわたしに勝とうなんざ千年早いー！」

「…おい。」

萌は声のした方向に振り向いた。そこには十三歳ぐらいの青年が  
居た。髪は萌と同じプラチナブロンドで、男性らしい長さに切られ、  
瞳は濃い緑。ある程度整った顔はどこかの国の王子の雰囲気をも  
し出していたが、この青年、実は二十一歳である。

「あるにい在兄！」

萌は青年、つまり在の姿を確認すると笑顔で走り寄った。



「在兄！じゃねえよっあーあ、壁を壊しちゃって…怪我人も出てるし、回復班が泣くな…」  
「うっ…」

在は深いため息をついて軽く俯く。それを見て萌は引きつった顔で一步下がった。

在がこう言うのも、萌の後ろには十人から二十人ほどの成人男性が倒れていたからである。しかも、それだけではなく壁にはところどころに大きな穴が空き、床にはクレーターが出来ていた。

「で、でもこのくらいで月ノ君は来ないでしょ?!」  
「来るって!」

さて、まずは説明をします。ここは創庭、創庭とは、十一の位に分かれた一つの集団とその場所を示します。位は下から閣関閣閉これらは四つで一つの位で、門ノ君と呼ばれます。その一つ上は天雲地雲で、この二つも二つで一つの位です。雲ノ君と呼ばれます。さらに一つ上は星ノ下、その上は星ノ上これらは星ノ下ノ君、星ノ上ノ君と呼ばれます。その上は月で、月ノ君です。月ノ君は十人しかいません。その上は太陽で太陽ノ君は二人しかいません。一番上は神判で、たった一人です。神判が創庭の全ての指示を出します。

次は班についてです。全ての位（神判と太陽は除く）は三つの班に分かれています。一つ目は回復班、一番人数が多く、他の班の傷を癒したり、建物の修理や書類整理も行います。二つ目は武術班、主に攻撃的な人が集まる、二つ目に人数の多い班です。三つ目はとにかく人数の少ない特殊班です。これは色々な人がいますが、主に自然に逆らっている人が集められます。（例として、在は常人よりも成長が異常に遅い。）

「萌、それよりもお前って特殊班だろ。」

「うん、そつだよ。在兄もでしょ。」

「つてことは、特殊班月ノ君班長の俺が怒られんだよっあの泉に！」

「泉さん優しいじゃん」

「いや、怖いつて」

ちなみに、在は特殊班に属し数少ない月ノ君で、特殊班の班長である。萌は星ノ下の君である。泉とは回復班月ノ君で、班長である。班長とは読んで字の如く、班の中で一番偉いのでつまり、班員の失態は本人の責任は勿論、班長の責任にもなるのである。

「俺、今度こそ死ぬかも……」

「……」

萌は在から目をそらす。それもそのはずで萌はたびたび建物を壊す常習犯なのだった。ちなみに、この異常な怪力こそが萌が特殊班に属している理由の一つだから皮肉なものである。

第一話「少女とその兄」（後書き）

説明長い！！（当社比）くどい！！（当社比）とても、面倒でした  
∴ orz

## 第二話「少女と獅子と神判」

「二人とも、そんなコトを言ってるよと本人が来そうだよ」  
「<sup>ゆき</sup>雪さん！」

二人が声のした後ろを振り向く。そこには白い艶やかな髪を肩につかないぐらいで切り、紫の瞳を持った十七歳ほどの少女、雪がいた。にこやかに笑みを浮かべながら、二人に近寄る。無駄な脂肪のついてない、細く力強い体は名前の雪という儂いイメージとはかけ離れ、少女でありながらも誰もが百獣の王を思い浮かべるようだった。そして、雪は武術班月ノ君班長なのである。

「お前、任務で帰ってこないんじゃ……」  
「それがさあ、私が行ってみたらオーパーツが苦手なタイプだったんだよね。」  
「ふーん。」

ちなみに、任務とは創庭にいる者達の仕事の総称である。主に異界へ行き、オーパーツと呼ばれるものを『こわす』または『持ち帰る』というものが多い。

「じゃあねー私、行くところあるから……っとそういえば任務だったさ、特殊班班長。」  
「わかったよ。武術班班長。」  
「んじゃ行くところ！」

そうして、在と萌は武術館をそのままに、そこから立ち退いたのであった。

## 神判ノ間

「やつほー二人ともよく来たねー」

「リカさん…」

「何してるんですか?」

「いや、別にー色々?」

「いや、本読みながらキーボード打って、お茶飲んでケーキ食べるって無理がありますよ。」

「気にしないで」

「…はい。」

とても無理のあることをしているこの少女、リカこそが創庭の頂点に君臨する神判である。赤茶の肩ほどで少し癖のある髪と、生き物であることを疑うようなピンクの瞳は見るもの全てを惹きつける美しさと輝きを放っていた。雰囲気は楽観的に言葉遣いとは裏腹に脆く儂い。しかし、その奥には一つの集団の頂点に君臨するが故の力強さとカリスマ性を秘めているようだった。

なのだがしかし、リカは『やるときはやる』というタイプの人で、普段は『仕事をきちんとなしつつ自らの楽しさを追及している』らしい。仕事の出来や、そもそも神判という仕事をしている時点で天才という分類に属するのだろうか、かなりの奇人としても有名である。まさに『天才と奇人は紙一重』なのだろう。

「任務だよねー…はい、」

リカが在に渡した資料とは、普通のコピー用紙に十枚ほど。全てが文字でびっしりと埋まっていた。

「今回はオーパーツを『こわして』ね」

「わかりました。」  
「りょーかいです！」

二人は神判ノ間を出て、時空ノ間へと向かった。

時空ノ間

その部屋は五つほどの四角い箱が置かれた薄暗い所だった。その箱は成人男性が四人程入れる大きさで、ピンクと銀のベールに包まれているように光っていて、壁は透明なガラスの様なものになっており、薔薇と百合がそれぞれピンクと銀で描かれていた。

在と萌はその箱に入り、在が先ほど手渡された紙の一部をを読み上げる。

「えっと…空間ナンバー9567、時間ナンバー8074、F-01地点へ。特殊班月ノ君班長、在」  
「同じく特殊班星ノ下ノ君、萌。」

『確認完了。空間ノ神ノ許可ガ下リマシタ。移動開始シマス。』

その機械音が終わると同時に、二人は白い細かい粉へと変わって、溶けるように消えていった。

## 第二話「少女と獅子と神判」(後書き)

実はこの話はリメイクなんです、話が進むにつれて原文(?)の倍近い文の量になっていくので、ちよつと驚いてます) ……)

### 第三話「少女と猫とその飼い主」

…ここはどこだろう。

『彼女』が立っていた。ああ、これは『夢』だと、ふいにおもった。いつもいつも繰り返し見る、あの『夢』。時間はいつもの通り夜だった、真つ暗で『彼女』がよく見えなかった。なぜか見てはいけない気がした。雲の間から月光が射した。『彼女』が見えた。『彼女』の髪とその肌は、血で染まっていた。生々しくぬらぬらと月光をうけて光るそれは、まだ浴びて間もない他人の血だった。

「萌!!」

「…っ在兄、」

目の前には焦った在の顔が夜の闇の中にぼんやりとあった。萌は倒れていた自分の体を起こし、夢から覚めた安心感で長く息を吐く。ふと、周りを見回すと、萌達は芝生の上に座つてることと、なにやらコンクリートの建物の近くにいることが分かった。

「…ここ、どこ?」

「座標に狂いはないはずだ。ここは、美術館みたいだな…」

「案内人は?」

「今回はなしだ。」

案内人とは、文化があまりにも違う世界だった場合に存在し、言葉通りその世界でのしきたりや言語を教えてくれる存在だ。



「ここに居れば誰か来るらしいんだけど…」

在兄がきよろよると回りを見回したと思うと、ぴたりと一点を見て動かなくなつた。萌は在の視線をなぞる様にその方向を見る。そこには夜の闇に紛れる事無く、黒い猫が居た。真つ黒で、額には星があつて…

「ラーン！」

女性の、大きくないのに力強くてよく通る声が聞こえた。ラーンとは猫の名前のようで、猫をあらためラーンは声に反応し、声のほうを見た。その方向を萌と在が見ると、女性が立っていた。上下とも人工的な黒い服を着ていて、髪はどこか服と同じく人工的な輝きを放つ腰ほどまである長い黒髪。顔はちよつど逆光になっていて良く見えなかったが、なんとなく美人を期待するような雰囲気を感じていた。夜の闇に溶け込みそうな色とは少し違うのに、違和感が無いのは人工的な芝生とコンクリートの所為なのだろうかと思つた。

その時、それほど離れていない場所でパトカーのサイレンが聞こえた。同じように女性もその音が聞こえたらしく、一度その方向を見てから萌達の前に小走りで近づく。

「捕まると面倒。ラーンおいで、そこの人たちも。」

「あ、ああ。」

「はいっ」

女性に着いて足音を立てないように行って、たどり着いたのはただの物陰だった。そこで女性は突然立ち止まり、萌達の方を向いた。そして

「目、閉じて。絶対にあけるな。」

その言葉に、萌と在が少し戸惑いながらも目を閉じると女性は猫であるラインにも同じ指示を出し、自身も目を閉じた。

ほぼ同時に女性は口を開く。

「空間よ、闇よ我が力の主なり、力の主を移動せよ。」

萌と在は目を閉じたままだったが、頬に何か冷たいものが当たったようだ、薄れ行く意識の中で感じた。

### 第三話「少女と猫とその飼い主」(後書き)

ラインと女性については次の話で名前やら何やらが出てきます^^

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5831/>

---

プラスマイナスゼロの日常式

2010年12月9日13時38分発行